

リエズ（フランス、アルプ＝ド＝オート＝プロヴァンス県） の文化財発見の歴史とその活用の現在

奈良澤 由 美

城西大学 現代政策学部

Antique and Medieval Monuments of Riez, Alpes-de-Haute-Provence, France: Their Discovery, Development and Current State

リエズはアルプスと地中海を結ぶ交通の要所に位置し、古代・中世を通じ、さらに18世紀末まで、この地方の中心都市であった。現在の人口は1,700人余りまで縮小しており、観光と農業を主な産業としている。フランスの南東部に位置するプロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地方の5県のうちのひとつアルプ＝ド＝オート＝プロヴァンス県に属するが、同県の中では最も目に見える形で古代遺跡を保持しているコミューヌである。比較的豊かである文化財をいかに活用するか、リエズでは19世紀以降さまざまな試みがなされてきた。その歴史を振り返りながら、2017年時点での現状を報告し、問題点と今後の方向性を考えることを本稿の目的としている。

リエズの文化財研究に私が関わりを持つようになったのは、カミーユ・ジュリアン研究所⁽¹⁾の研究員であるフィリップ・ボルガールの主導による古代都市リエズをめぐる共同研究プログラム⁽²⁾への参加したことが直接的な契機であった。同研究プログラムは2004年から開始され、現在最終的な報告論文集が準備されている。

この共同研究プログラムは、その発動当初より、町の文化財再生計画と連携していた。リエズとその周辺地域に残される考古遺跡・歴史遺物を観光の主眼として再開発し、町の観光の活性化させることを目的とし、リエズの古代都市としての価値を高めるために、大浴場遺跡（およびその上に建設された司教座聖堂遺跡）の発掘・整備、遺跡公園の建設、歴史建造物に指定されているマザン館（16世紀）内への博物館の創設などが、文化財再生の主要プロジェクトとして計画された。博物館の創設準備と平行し、私は特に初期中世の石造彫刻の研究を担当してきた⁽³⁾。

県、市、文化省、CNRSなどからの支援により進められてきた研究プログラムであるが、その成果としての文化財再生プロジェクトが達成されるまでには、長い年月、そして費用が必要とされることは、予想されていたことではあった。

リエズの現在と過去

リエズは現在では住民1,700人ほどのコミューヌ（フランスの最小行政区自治体）である。コミューヌは日本における市町村のような単位となるが、人口の大きさに応じて名称が区別されることはなく、すべてが「コミューヌ」という名称の範疇に属する。とはいえ日本的な「都市・町」と「村」に相応する言葉 *ville* と *village* がフランス語でも当然存在する。*ville* という用語は行政用語としてコミューヌ（「市」と訳す）を示すこともあるが、より一般的には大きな集落である「都市・町 *ville*」を表すのに対し、*village* は小さな集落としての「村」を表す。そしてある集落が「都市・町 *ville*」と呼ばれるか「村 *village*」と呼ばれるかは、しばしば主観的な基準により判断される。その基準は人口の大きさだけではなく、商業や教育において最低限の施設の施設を有しているか、つまり学校、病院、ポストなどが存在するか、あるいは周辺の地域と比して中心地であるか、など様々な要素が関与してくる。それでは、リエズは「都市・町 *ville*」であるか「村 *village*」であるか。おそらく現時点ではリエズは「村 *village*」という呼称のふさわしい小規模のコミューヌではあろう。しかしリエズのことをよく知る人ほど、かなりの躊躇と釈義がなければ返答できない問いかけである。実際、長い過去においては、リエズは明らかに「都市・町 *ville*」という呼称にふさわしい歴史を有しているからである。

ローマ帝政期初期、リエズは帝国の植民市となり、その後キウィタスの称号を与えられている。つまりリエズ（古代名 *Civitas Reiensium*）はローマ帝国の行政地域であるガリア・ナルボネンシスの主要都市のひとつであり、アルプスと地中海を結ぶ交通の要所に位置するこの地方の中心都市であった⁽⁴⁾。この場所の重要性は、ローマ支配以前の時代、ケルト＝リグリア時代の状況から引き継がれたものであり、ここには *Reii* という部族の要塞集落 *oppidum* が存在していた⁽⁵⁾。この要塞集落 *oppidum* は現在のリエズの市街地を北東から見下ろすサン・マクシムの丘上にあつたと推定されており、一方ローマ時代のリエズの町は現在の市街地の西南側に広がっており、コロストル川とオヴェストル川の二つの川により縁取られていた。古代の町の発展は特にフラウィウス時代からがめざましく、コロストル川南にガリア・ナルボネンシスでも最も大きな浴場の一つに数えられる建築複合体が建設されている。

キリスト教時代になるとリエズには司教座がおかれ、5世紀に司教座聖堂と洗礼堂がコロストル川南のローマ浴場地に建築される。のちにリエズの聖人として崇められるようになった司教マクシムス（427年以前-452年以降）については、6世紀の総督ディナミウスが記した聖人伝 *Vita* により良く知られている⁽⁶⁾。7世紀後半から10世紀までの期間のリエズについて語る史料は大変少ないが、この時代に司教座聖堂はおそらくサン・マクシムの丘上に移されたと推定される。とはいえ最初の司教座聖堂の近くにも集落は存続しており、12-13世紀にはこの最初の聖堂が大きく改築され、聖母に捧げられた小司教区教会堂となっている。百年戦争の混乱期である14世紀の後半、周辺の他の町村同様、リエズの市街地は城壁に囲まれるようになり、1500年に城壁

沿いに新しく司教座聖堂が建設される。最初の司教座聖堂は破壊されてプロテスタントの所有となり、その敷地は墓地として使われ、洗礼堂のみが礼拝堂として残された。城壁沿いの司教座聖堂は1842年に崩壊し、4年後に同じ場所に現在の司教座聖堂が立てられている。

リエズの人口の顕著な減少はフランス革命以降であり、1960年代まで減少が続いた。19世紀～20世紀の町の衰退は、県庁所在地となったディーニュの発展とは好対照をなしている。革命前である1760年頃、リエズもディーニュもそれほど変わらない人口を有していたとされるが、現在ディーニュの人口が1万7千人以上であるのに対して、リエズはその十分の一に過ぎない。とはいえ、リエズの人口は1968年には1379人であったので、現在は若干回復傾向にはあることは確かである⁽⁷⁾。

現在のリエズには、郵便局、病院、小学校、中学校、ホテルやレストランがあり、毎週大通りでは市場が催され、周辺の小さな村の住民たちが集まってきている⁽⁸⁾。高校はなく、子供たちはマノスクの高校へ通い、そして大学については、エクサン＝プロヴァンスやマルセイユ、あるいはさらに遠い都市の大学へ進学していく。アルプ＝ド＝オート＝プロヴァンス県内には大学がないため、若者の流出が問題のひとつとなっている。

リエズの現在の産業の主軸のひとつは観光であり、周辺の観光地、たとえば陶器で有名なムスティエ・サント・マリー、ヴェルドン溪谷の自然公園、保養地のグレウーなどと結びついた観光コースの一環として、夏にはそれなりに多くの観光客が訪れる。一方、シーズンオフには町は閑散した様相を見せ、冬場に途絶える観光を活性化させることが大きな課題となっている。

もう一つの課題は交通である。リエズには鉄道駅は存在せず、また自家用車を使用する場合にも、高速道を降りてから40分以上の野山道の運転が必要となる。公共の交通はバスであるが、本数は非常に少ない。

リエズの文化財発見の歴史

栄えある長い歴史を保持するリエズの領域内には、過去の建造物の痕跡が数多く残されている。特にローマ時代の遺跡の存在は、この地域のアイデンティティとして認識されており、リエズが「古代の町」であることの自負心は少なくとも近世初期には存在していたことが文献・図像資料よりうかがうことができる。

近世以降の城壁に囲まれたリエズ市街地に西から向かう道の脇、町の入り口の前に4本の古代の柱がそびえ立つ（図1）。コロストル川の北岸に立つこの柱の周辺には野原がオヴェストル川まで広がっており、この野原の場所はローマ時代の市街区域であった。この古代の柱の遺跡は現在「カトル・コロヌヌ Quatre Colonnes（四本柱）」と、周辺の野原は「プレ・デ・カトル・コロヌヌ Pré des Quatre Colonnes」と呼ばれている。この4本の柱は実際にはローマ神殿の正面部分であり、大きな切り石の礎石造りのポディウム上に5.90mの高さの柱が立ち並んでいる。花崗岩製の柱身のそれぞれは大理石製のコリントス式柱頭を頂き、石灰岩製アーキトレーヴがそ



図1 2017年現在のカトル・コロヌ遺跡、背後にリエズの市街地とサン・マクシム丘（筆者撮影）

の上を渡っている。

「カトル・コロヌ」はリエズを象徴する景観として近世以降幾度となく記述され、あるいは描かれてきた（図2）。最も古くは1410年の勅令の文章中に、「俗にレ・コロヌと呼ばれている場所」という記述があり、リエズの町の入り口に古代柱が立ち並んでいたこと、この遺跡の存在が当場所の俗名として使われていたことが知られる⁽⁹⁾。1641年の市議会の議決の文章からは、この古代列柱はリエズ市民にとり大きな価値を持っていたことがはっきりとうかがわれ、文章にはこれらの素晴らしい柱はリエズの「公共の装飾」であると述べられている⁽¹⁰⁾。18世紀になると、この遺跡の記述や素描・絵画は格段に頻繁になる⁽¹¹⁾。たとえばパリの建築家・画家であったアントワーヌ・ムニエ（1765-1808）は、南フランスの文化財保護の任務を負ってニームに住み、南仏の町の水彩画を残したが、リエズの典型的な景勝の水彩画を1795年に描いている。同様に文化財の記録という目的のために南仏を調査旅行した考古学者のオーバン＝ルイ・ミラン（1759-1818）の著作 *Voyage dans les départements du midi*（『南仏諸県旅行記』）の中には、4本の古代柱を含むリエズの古代遺構・遺物のいくつかが記録されている。

一方で、この4本の古代柱の遺跡が本来どのような形をしたどのような機能を持つ建造物に属していたのか、正確な建築年代いつであるのか、様々に類推はなされつつも多くの謎が残されてきた。19世紀初頭からカトル・コロヌ周辺にトレンチを掘る考古学調査が試みられるようになる。初期の調査は当然ながら科学的方法論が十分でなく、柱の基礎部分を掘り出すにとどまっ



図2 アントワヌ・ムニエ『カトル・コロヌの風景、灰色花崗岩製、背景に見えるリエズの町からの遊歩道沿いに立つ』1795年 水彩画
(Source : Bibliothèque nationale de France - Collection Destailleur)

た。このころより、4本の柱は古代からずっとこの場所にあったのか、あるいはある時期にリエズの別の場所から移動されて町の入り口に設置されたのかが大きな疑問のひとつとなった。20世紀前半に頻繁に発掘が繰り返されるが、いずれも決定的な結論が導かれることはなく、また十分な調査の記録がなされなかったために、以降の研究にさらなる混乱を生じさせることともなった。その後、1950年代にアンリ・ローランが、1960年代にギー・バリユオルがより規模の大きな考古学調査を行い、カトル・コロヌの周辺に神殿の基礎部分の存在が確認された。1988年から地方考古局の要請により建築家ピエール・アンドレが建築構造の調査を開始し、遺跡全体に足場を組んで建造の細部までを測定、もはや30年近くにわたる検証の結論として、基礎部分は古代建造に属するが、上部構造はある時代に変更・修正されている可能性が指摘されている⁽¹²⁾。

カトル・コロヌとともに、リエズを象徴するモニュメントとして知られていたのは、「パンテオン」と呼ばれていた集中式プランの礼拝堂であった。カトル・コロヌからコロストル川を挟み200mほど南、やはりリエズの市街地のすぐ入り口に立っており、リエズを代表する景勝として18世紀から19世紀頻繁に描かれている(図3)。「パンテオン」という呼称は、この建造物の起源は古代の神殿であったと考えられていたためである。実際には5世紀に建築された洗礼堂であったが、洗礼堂として使用されていたのはおそらく中世初期までであり、使用されなく

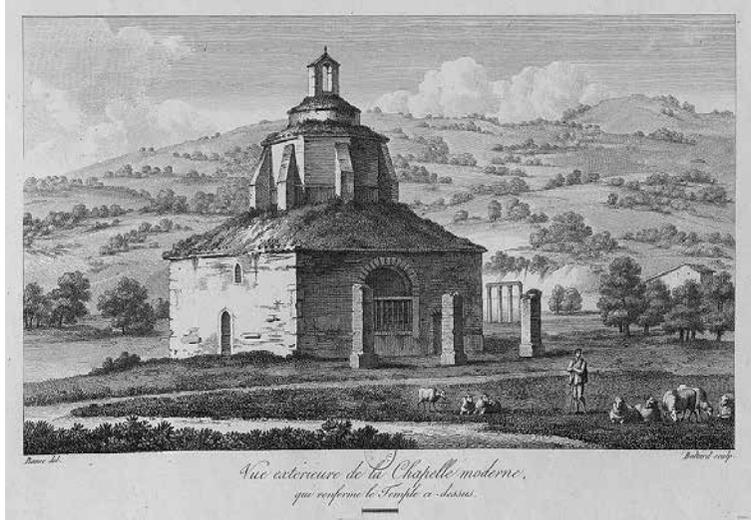


図3 リエズの洗礼堂の18世紀末の状況を伝える挿絵
(Source gallica.bnf.fr/Bnf)



図4 リエズの洗礼堂内部の18世紀末～19世紀初頭ころの状況を伝える挿絵
(Source gallica.bnf.fr/Bnf)

なった洗礼槽は埋められて床に覆われ、17世紀初頭にはサン・ジャン・エ・サン・クレルクという名を与えられた礼拝堂であった。そして18世紀末には放棄され、野に働く者たちが雨宿りに使う廃墟の建物となる。なぜ古代起源であると考えられていたか。まず、大変古い建物であったこと、そして集中式プランであったこと。古代建築に集中式のプランが頻繁に使用されていたことから、通常そうしたプランは古代のものと考えられる傾向があった。そしてなによりも、その内部には12本の古代の柱が再利用されていた(図4)。実際、異教起源とみなす見解が否定されたのは19世紀中ごろから後半にかけての幾たびかの考古学調査を経てのことである。



図5 1966年のギー・バリュオルによる司教座聖堂遺跡発掘
(ギー・バリュオル撮影)

1930年頃に、郷土歴史家マルセル・プロヴァンス（1892-1951）が主導し、市行政の助けを得ながら、洗礼堂の内部に碑文・彫刻博物館を創設した⁽¹³⁾。散逸していくばかりであったリエズとその周辺の石造遺物を収集して堂内に展示したのである。収集された作品の年代比定は特に中世以降のものについては不十分であり、また展示の方法も脈絡のないものではあったが、この後洗礼堂は古い彫刻群が並べられる場所となり、今後新設予定となっているリエズの博物館の碑文・彫刻のコレクションの基礎となっている

洗礼堂は5世紀に司教座聖堂に付随して建設された。洗礼堂が礼拝堂として存続し続けたのに対し、司教座聖堂は1500年ごろにすっかり破壊され平地となった。洗礼堂と司教座聖堂跡地の間には、19世紀初頭にはリエズ市街地内へと向かう道路が作られた。1841年にミッシェル・マイエの部分的な発掘によってこの最初の司教座聖堂の存在は示唆されていたが、1960～70年代のギー・バリュオルの発掘（図5）までは本格的な調査がなされることはなかった⁽¹⁴⁾。さらに2005年からフィリップ・ボルガール主導による発掘調査が実施され、その建築プランのおおよそが明らかになっている⁽¹⁵⁾。

司教座聖堂建設の前に同地に存在していた古代浴場（「南の浴場」）は、19世紀後半にリエズの市長でもあったベンジャマン・マイエの発掘により発見された。60年代以降本格的な調査が行われ、解明された構造体から判断するならば、ガリア・ナルボネンシスで最も大きな浴場のひとつであった⁽¹⁶⁾。

一方、ローマ時代のリエズにはもう一つ浴場があったことがわかっている。その「東の浴場」については、近年まで南西の端部分のみが調査されただけであり、全貌はわかっていない。

また、2006-2007年には共同研究プログラムの枠組みの中で中学校コレージュ・マクシム・



図6 サン＝マクシム聖堂内部（筆者撮影）

ジャヴェリの敷地内で発掘調査が行われ、中学校の建物の下に方形の埋葬用建築が発見された。古代末期すなわち5世紀から7世紀の数十の墓が収められている。しかし発掘はまだ部分的であり、調査は中断したままである⁽¹⁷⁾。

サン・マクシムの丘の上には、1662年建設のサン・マクシム聖堂がそびえ、その内陣に6本の古代の柱が使われている（図6）。いまだ本格的な発掘調査がこの場所に行われたことはなく、そのためリエズのケルト時代や初期中世について未解決の疑問が多く残されている。

文化財活用の状況と課題

リエズの過去を振り返ると市長やその身近な人物の興味や意欲により文化財の発見・保護および研究がなされていることが多い。2004年に始まったリエズと地域の共同研究プログラムを主導するフィリップ・ボルガールがこの地の考古学文化財研究に大きく足を踏み入れたのも、1990年代前半に市長であったエメ・バガリーの十分な理解と後押しがあったからであった。リエズにおいては市行政との連携が文化財の研究と活用に大きな役割を果たしてきた。

2014年春の市議員選挙により新しい市長がリエズに選ばれた。リエズの文化財にあまり関心をもたない新しい市行政の下で、共同研究の進行に伴って温められてきたプロジェクトは、2017年現在、その多くが延期あるいは頓挫している状況にある。

2004年の発動当初より共同研究プログラムは市の文化財再生計画と連携しており、研究は学



図7 2006年に撮影された司教座聖堂遺跡と洗礼堂付近
(Cl.: Cécile.Allinne)

術的な目的だけではなく、リエズとその周辺地域の観光的価値を高めることを目指していた。観光推進のために、リエズの考古遺跡・歴史遺物を観光の主眼として再開発し、地域の文化遺産の価値を高め、訪れる人々が満足できるような展示方法を実現させる。そのために、リエズ市行政や周辺コミュニティとの協力体制は不可欠であった。

そのうちでも最も大きな計画は、カトル・コロンス、洗礼堂、そして司教座聖堂遺跡を連結し、それぞれを市街地からの遊歩道でつなぐ考古学公園を作ることであった。リエズの最重要なこれらの遺構・遺跡を広々とした自然の敷地の中に巡る、こうした大きな公園を実現するためには、19世紀以来洗礼堂と司教座聖堂跡の間を走っている道路（図7）をまず除去しなければならない。この道路は現在南からリエズへのアクセスの主要道路となっている。かなり難しい決断ではあったが、2014年直前の段階では実現可能な計画となり、そのための国からの予算も確保されていた。この道路を取り除く際には道路下を発掘することが可能となり、司教座聖堂と洗礼堂をつなぐ空間の解明が期待された。実際、司教マクシムスが夜の祈りの時に訪れたと聖人伝が語る「*templi vestibulum* 聖堂の前室」⁽¹⁸⁾がこの道路の下にあるのではないかとこれまで推定されており、学術的にも大きな価値がある計画である。しかし現市長の着任以降、現時点では実現のめどが立っていない。

一方、洗礼堂自体の建築調査と一般公開のための改修は、現時点で唯一実現した計画となっている。2007年から洗礼堂内壁の塗料をはがし、壁面全体を測定記録する調査が始められた。調



図8 2017年現在の洗礼堂内部（筆者撮影）



図9 2017年現在の洗礼堂内部、洗礼槽周辺（筆者撮影）



図 10 2017年現在の洗礼堂正面（筆者撮影）

査によって5世紀の壁面がかなりの高さまでほぼそのままに残されていることが確認され⁽¹⁹⁾、内部の壁面は礎石の状況が分かるように白い漆喰で薄く整えられた（図8）。洗礼堂中央にある洗礼槽は2010-2011年に改めて考古学調査の対象となり、調査後透明な板によって内部が見える状態で保護された（図9）。洗礼槽周囲には5世紀にはキボリウムがあったと推定されているが、その存在を示唆するために色塗りによって明示された。またキューポラ内を照らすライトが壁と床に設置され、見学者が快適な光で内部を上方まで観察できるようになった。洗礼堂入り口の扉、外装、そして屋根については1808年以前の状態に改修された（図10）。改修された外観は決して5世紀の状態ではないが、図像資料で知ることのできる最古の状態である。

新しい装いとなり落成式が執り行われた洗礼堂であるが、しかし現在のところ定期的に公開するための準備が整っていない。2017年はほとんどの期間閉鎖されており、8月後半の2週間だけ例外的に扉が開かれたが、その時には監視人は誰もおらずただ放置されていたとのことであった。私は9月初めに現地を訪れ、市役所から鍵を借りて内部を見学したが、解説文のパネルなどはまだほとんど設置されていなかった。

上記の洗礼堂内壁調査の段階で、洗礼堂内部に置かれていた碑文や彫刻はリエズの遺物倉庫へ移された。市街地の住宅を改造した遺物倉庫には、リエズおよび近隣のコミューンで行われた発掘調査から出土した遺物が保管されている。リエズ地域の重要な碑文・彫刻については、新しい博物館に展示される予定である。新博物館は10年以上前より準備が進められており、計画ではもはや数年前には開館している予定であった。歴史建造物に指定されている16世紀建設のマザ



図 11 2017 年現在のマザン館外壁（筆者撮影）

ン館が、新しい博物館の建物となる。損傷の激しかった建物の内部を修復し、展示にふさわしいように改装する計画が建築家 M. テュルベール主導により準備されている。工事が始められたのはすでに 6 年ほど前であるが、現在でも工事中の状態のままである（図 11）。

これらの文化財活用プロジェクトの滞りは、前述したように市行政の変化にまず因る。さらに複雑な状況として、それぞれの文化財と関連施設を管轄しているところが同じではないということがある。たとえば洗礼堂と司教座聖堂遺跡はコミューヌの管轄であり、2016 年まではリエズの観光案内所も同様であった。よって洗礼堂の鍵は観光案内所が預かり、見学者の受け入れも観光案内所が行っていた。しかし 2017 年 1 月から DLVA（Durance Luberon Verdon Agglomération⁽²⁰⁾「デュランス・リュベロン・ヴェルドン地域集合体」）の管轄となったことにより、洗礼堂の見学をどこが請け負うのが明確でない状態になっている。計画中の新しい博物館も DLVA の管轄であるが、市行政との連携は当然不可欠であるので、協力関係がスムーズではなくなった現在、計画の進展も滞ることとなった。一方新しい博物館の建物に予定されているマザン館は国の所有であり、歴史建造物指定されているため、改修には多くの規制が伴う。遺物倉庫は県と国の管轄であるが、2014 年以前はコミューヌの関係者が管理を行っていた。現在は倉庫内の遺物へのアクセスは簡単ではない状態になっている。

2004 年以降十年に及ぶ共同研究プログラムを通して、司教座聖堂や古代末期墓地など各年に行われた発掘調査の成果を市民に知らしめるために、定期的に現地説明会が行われてきた。少なからぬ市民がリエズの文化財に関心を持ち、自分たちの歴史として大事にしていることは確かだ

ある。しかし市議会選挙は多数決であり、市の経済発展を実感できないとき文化財政策は後回しにされたということになるのだろう。リエズの観光産業の発展の実現を確信することは難しい。交通の便の悪いマイナーな観光スポットであり、実際日本人の観光客の姿を見たことはほとんどない。城壁内の市街地には空室のアパートが目立つ。一方郊外にはマノスクやディーニュに仕事に通う世帯や、あるいは隠居した老人世帯の住居が多く、新しい住宅の建設が行われている。

とはいえリエズの観光的価値を高めるための文化財の潜在力は十分にある。現在たとえ市行政との連携が滞っていても、将来的に一貫性をもった長期的なプロジェクトを続けることにより、より魅力ある観光地としての村づくりが可能になるはずである。次の市議会選挙は3年後となる。

また、プロヴァンス地方の中では知名度の低いこの地域の観光推進のためには、それぞれのコミューンの連携がさらに不可欠である。夏のヴェルドン溪谷の自然公園、陶器の村ムステイエ、アルマーニュなどの村々の冬のトリュフ祭り、温泉とカジノのある保養地グレーウーなど、地域にはそれなりに魅力ある観光資源が存在しており、地域集合体としての発展のために文化財政策を請負う DLVA が存在する。観光国としてのフランスの底力であろう。

埋蔵文化財については、調査が中断され、あるいは実現する可能性が現時点ではなくとも、破壊されるわけではない。未来の調査までそのままに保存される。マルセイユのような大都市とは異なり、リエズは小さなコミューンであり、大きな開発はほぼなく、考古学調査について急を要する事態ではない。人口が縮小していった辺鄙な地であったからこそ、カトル・コロヌも、洗礼堂も古代より残されてきたとも言える。実際 19 世紀の初歩的考古学調査は多くの資料を破壊した。調査と破壊は紙一重であり、十分な成果を得られる見通しが立たないときには、調査が延期されることはむしろ望ましい。

リエズの文化財研究と活用にはいかに長い年月が必要であるか、それを実感させる近年の状況であった。今後、たとえば最も大きなプロジェクトであった遺跡公園を実現するためには、洗礼堂前の道路を撤去することに対しての市民の広い理解が必要となってくるであろう。そのためには、遺跡公園が観光にどの程度貢献する可能性があるのか、予測される具体的な効果を示すための調査が必要となる。しかし共同研究プログラムが終了した現在、そうした調査を可能とするような今後の見通しは立っていない。新しい博物館については、たとえ時間がかかるとしても、DLVA 主導により従来の計画に沿って着実に進められていくことを誰もが期待している。洗礼堂の展示と見学については、来年の夏までに市が対策を講じるように、これまで共同研究にかかわった研究者から市長への直接の進言が続けられている。そして、これまでほとんど考古学調査が行われないサン・マクシムの丘が将来の可能性として残されていることが指摘される。この丘にはケルト＝リグリア時代の要塞集落と初期中世のいくつかの聖堂および集落が存在していた。これまであまり開発や破壊を受けておらず、調査によって大きな発見があることが期待される。この丘が本格的な考古学調査の対象となり、いつか遺跡公園として観光資源化されるという構想は、現時点での大きな未来の夢であろう。

《注》

- (1) Centre Camille Jullian (UMR 7299)
- (2) 共同研究プログラム (PCR) « *Riez et le territoire riezois. Approches diachroniques* 》。この共同研究プログラムの協力協賛組織としては、カミーユ・ジュリアン研究所以外には、リエズ市、フランス文化省 Ministère de la Culture, プロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地方文化局 Direction Régionale des Affaires Culturelles PACA および同地方考古部局 Service Régionale de l'Archéologie がある。
- (3) 暫定的な研究報告としては : Y. Narasawa, « Le mobilier lapidaire liturgique du Moyen Age découvert à Riez et dans ses environs ». In : *Riez, de la cité antique au diocèse médiéval. Parc naturel régional du Verdon : Courrier Scientifique*, Hors-Série n° 2, 2010, pp. 73-77.
- (4) J. Guyon, in *Topographie chrétienne des cités de la Gaule... II*, pp. 35-42.
- (5) *Ibid.*
- (6) P. Boulhol, P.-A. Jacob *et al.*, *Maxime de Riez...*
- (7) http://www.cartesfrance.fr/carte-france-ville/population_04166_Riez.html; <http://www.linternaute.com/ville/riez/ville-04166/demographie>
- (8) <http://www.ville-riez.fr/> (リエズ市のホームページ)
- (9) Ph. Borgard, « Riez », in *Carte archéologique...*, p. 363.
- (10) M. Heymes, « Faut-il donner nos Colonnes ? », *Les Amis du Vieux Riez, Bulletin d'information*, 24-25, 1986, pp. 7-8. Cf. Ph. Borgard, « Riez », in *Carte archéologique...*, p. 364.
- (11) F. Heullant, « La découverte de monuments antique riezois... » ; Ph. Borgard, « Riez », in *Carte archéologique...*, p. 363 ; F. Heullant, « Le voyage d'Antoine-Ignace Mellin dans le Midi ... ».
- (12) ビエール・アンドレの研究調査は、近年中に出版される予定である共同研究プログラム « Riez et le territoire riezois » の最終報告書である論文集の中で報告される。
- (13) M. Provence, *Catalogue du musée lapidaire de Riez...* ; Ph. Borgard, J. Favreille, *Catalogue du musée lapidaire de Riez...*
- (14) G. Barruol, *Fouilles archéologiques de Riez...* ; Id., « Riez, groupe épiscopal, cathédrale et baptistère »...
- (15) Ph. Borgard, C. Michel d'Annville, « Le groupe épiscopal... ».
- (16) Ph. Borgard, C. Michel d'Annville, « Regard sur les monuments du Haut-Empire. Les thermes »...
- (17) G. Granier, Ph. Borgard, « L'édifice funéraire... ».
- (18) P. Boulhol, P.-A. Jacob *et al.*, *Maxime de Riez...*, pp. 126-127.
- (19) 調査結果は近年中に出版される最終報告の論文集の中で発表される予定。
- (20) DLVA のホームページ : <http://economie.dlva.fr/>

【主要参考文献】

- G. Bailhache, « Riez. Baptistère », in *Congrès archéologique de France, 95^e session, Aix-en-Provence et Nice, 1932*, Paris, 1933, pp. 75-88.
- G. Barruol, *Fouilles archéologiques de Riez, Basses-Alpes*, Rapport dactylographié présenté au Service Régional d'Archéologie, 1966-1972.
- Id., « Riez, groupe épiscopal, cathédrale et baptistère », in *Les premiers monuments chrétiens de la France, I, Sud-Est et Corse*, 1995, Paris, pp. 85-93.
- Ph. Borgard, « Riez », in *Carte archéologique de la Gaule : 04 Les Alpes-de-Haute-Provence*, éd. Par G. Berard, Paris, 1997, pp. 361-395.
- Id., « Le baptistère de Riez, de Simon Bartel à Marcel Provence. Heurs et malheurs d'un Panthéon

- converti en musée lapidaire », in *Mélanges offerts à Gaëtan Congès et Gérard Sauzade*, dir. J.-E. Brochier, A. Guilcher, M. Pagni, Aix-en-Provence, 2008, p. 767-789.
- Ph. Borgard, J. Favreille, *Catalogue du musée lapidaire de Riez, Les Amis du Vieux Riez, Bulletin d'information*, no. 56, 1994.
- Ph. Borgard, C. Michel d'Annville, « Le groupe épiscopal de la cité de Riez (Alpes de Haute-Provence) », *Bulletin de l'Association pour l'Antiquité tardive*, n° 18, 2009, pp. 41-45.
- Id., « Regard sur les monuments du Haut-Empire. Les thermes », in *Riez, de la cité antique au diocèse médiéval. Parc naturel régional du Verdon : Courrier Scientifique*, Hors-Série n° 2, 2010, pp. 40-41.
- Id., « Le groupe épiscopal de Riez : insertion et évolution des bâtiments au sein de la ville la fin de l'Antiquité et au Moyen Age », in *Urbanisme et architecture en Méditerranée antique*, Tunis, 2013, pp. 293-305.
- Ph. Borgard et alii., *Riez (Alpes-de-Haute-Provence). Pré de Foire - Pré du Chapitre : Fouille programmée - Campagne 2009*, Rapport présent au Service Régional d'Archéologie, 2009.
- P. Boulhol, P.-A. Jacob et al., *Maxime de Riez entre l'histoire et la légende. Dynamius le Patrice, Vie de saint Maxime, évêque de Riez. Fauste de Riez, Panégyrique de saint Maxime, évêque et abbé*, Valensole, 2014.
- J.-J.-M. Feraud, *Histoire, géographie et statistique du département des Basses-Alpes*, Nyons, 1972.
- H. de Gérin-Ricard, *Carte archéologique de la Gaule romaine (Forma Orbis Romani)*, VI, *Les Basses-Alpes*, 1937.
- G. Granier, Ph. Borgard, « L'édifice funéraire du Collège Maxime Javelly », in *Riez, de la cité antique au diocèse médiéval. Parc naturel régional du Verdon : Courrier Scientifique*, Hors-Série n° 2, 2010, pp. 48-51.
- J. Guyon, *Les premiers baptistères des Gaules (IV^e-VIII^e siècles)*, Roma, 2000.
- F. Heullant, « La découverte de monuments antique riézois. Iconographie des XVII^e-VIV^e siècle », in *Riez, de la cité antique au diocèse médiéval. Parc naturel régional du Verdon : Courrier Scientifique*, Hors-Série n° 2, 2010, pp. 34-37.
- Id., « Le voyage d'Antoine-Ignace Melling dans le Midi de la France. L'étape des Basses-Alpes, correspondance et dessins (1819) », *Chroniques de Haute-Provence*, n° 377, 2016, pp. 5-65.
- M. Heymes, « Notes sur les églises et chapelles de Riez des origines à nos jours », *Les Amis du Vieux Riez, Bulletin d'information, Supplément au no. 30*, 1987, pp. 1-20.
- Id., « Un manuscrit inédit : Description de la ville de Riez en Provence par M. J. Solomé, prêtre (1720-1750) », *Chroniques de Haute Provence*, 2008, no. 360, pp. 137-164.
- M. Provence, *Catalogue du musée lapidaire de Riez*, Riez et Moustiers, 1932.
- Topographie chrétienne des cités de la Gaule : des origines au milieu du VIII^e siècle*. II. *Provinces ecclésiastiques d'Aix et d'Embrun (Narbonensis Secunda et Alpes Maritimae)*, Paris, 1986.